剣峠麓に源を発し、内宮域内で島路川と重なり
伊勢湾へと注ぐ五十鈴川。
御手洗場で参拝者を清め、烏帽子岩前で禊が行われ
河口の二見では神様の塩がつくられる。
倭姫命が御裳裾を濯がれた清めの川を旅します。

特集

清めの五十鈴川

御手洗場で手水をとる参拝者。

宇治橋の大鳥居をくぐり、橋上から望む五十鈴川は、いつも清らかに流れています。大雨や台風で少し濁ることがあっても、すぐに澄みきって元通りに。

将来の御造営用材を目指す桧とともに、多様な木々を育む神宮林が上流域に広がり、雨をたくわえ浄化する力を発揮してくれているからです。

古代、天照大御神の御鎮座地を求め諸国を旅した倭姫命が、伊勢に至り大御神からお告げを得て社（神宮）を建てたのが、ここ五十鈴の川上です。『倭姫命世記』には、倭姫命が五十鈴川で御裳（みも）の裾（すそ）を濯がれたとあり、そこから衣濯川（いすすぐかわ）と称され、御裳濯川とも雅称されます。

神域で島路川と合流

五十鈴川は、伊勢市と南伊勢町の境となる剣峠（つるぎ）の麓に源を発し、島路山を水源とする島路川と内宮域内で合流して一本になります。神域を出ると宇治の町に沿って下り、神宮神田のある楠部町の下流で分流し、伊勢湾へと注ぎます。

剣峠越えは南伊勢とお伊勢さんを結ぶ最短路。広葉樹がうっそうと繁る森を、大岩を縫って清冽な水が下りますが、傾斜がゆるいので流れは思いのほか穏やかです。水田や民家が現れると高麗広（こうらいびろ）で、川の恩恵にあずかってきた人々の暮らしぶりが垣間見られます。

流れを斜めに横切る飛び石が見えたら、内宮はまもなく。瀬音に導かれるよ

烏帽子岩の少し上流に架かる宇治橋は、聖と俗の架け橋と言われる。

清冽な流れが岩を縫って下る源流域。

風日祈宮橋から望む島路川。瀧祭神の手前で五十鈴川と合流し、宇治橋へと下る。

御手洗場で汲んだ水とともに瀧祭神を参拝。

上／月初めの早朝、神宮研修所の学生たちは烏帽子岩前で禊を行う。
左／烏帽子岩近くに憩う鯉。

うに宇治橋を渡って神域へ。五十鈴川は聖俗を隔てる結界でもあります。

玉砂利を踏み締め、火除橋（ひよけばし）を過ぎると、右手に手水舎が建ち、その先に五十鈴川に面した御手洗場（みたらし）があります。どちらも参拝の前に、水で手と口を清めるための場所。さっぱりと、すがすがしい気持ちで参道をお進みください。

御手洗場の近くに、五十鈴川を守護する瀧祭神が鎮まっています。皇大神宮の所管社で、社殿はなく、板垣に囲まれた石畳に祀られています。

伊勢では七月の土用丑の日と八朔（八月一日）に五十鈴川の水を汲んで瀧祭神に詣で、その水を家の神棚にお供えすると無病息災で過ごせるとの風習があります。暑い盛り、体調管理に気を配って緑陰の神宮へ詣で、いっぷくの清涼とともに、お水の力をいただいたのでしょう。

瀧祭神の上手にある風日祈宮橋（かざひのみのみや）から眺めるのは支流の島路川です。橋の南端の擬宝珠には「太神宮風宮五十鈴川御橋　明應七年戊午本願観阿弥敬白」の銘があり、かつてはこちらが五十鈴川と呼ばれていたことがわかります。

河口域で奉製される御塩

宇治橋の下手、鯉が群れあそぶ川中に烏帽子岩が立っています。夏になると地元の子らが水遊びに興じるこの辺りでは、月初めの早朝、神宮研修所の学生たちが禊を行います。

神宮研修所を出発した神職のたまごた

炎天下に行われる御塩づくり。二見の潮から神宮の御塩が奉製されるようになったのも倭姫命の御巡幸以来。〈御塩浜〉

御塩の焼き固めは春と秋の2回。〈御塩殿〉

鹹水を煮詰めて荒塩をつくる。〈御塩焼所〉

五十鈴川から海水を引き入れ、天日で結晶した塩が付いた砂を集めて鹹水をつくる。〈御塩浜〉

五十鈴川河口から汽水域の汐合を望む。右岸に設けられた御塩樋管から御塩浜へ海水を引き込む。

ちは、河原に着くや、ふんどし一丁になり、作法に則り水中へ。気をつけていても衣服が汚れるように、人の心身も知らずと穢れをまとってしまうもの。神道では古くから滝や川、海などで禊が行われてきました。その伝統は、かつてお伊勢参りの人々が、清渚とよばれた二見浦で身を清めてから神宮を拝したことにも通じます。

五十鈴川の淡水と伊勢湾の海水がまじりあう辺りは汐合（しわい）とよばれ、夏の土用には河畔の御塩浜で、古来の入浜式により神宮の御塩づくりが行われます。

炎天下、海水と淡水がほどよくまじった水を塩田へ引き込み、塩が結晶化した砂を集めて塩分濃度の高い鹹水（かんすい）を仕込みます。それを御塩殿神社境内の御塩焼所へ運び、平釜で煮詰めて荒塩にし、春と秋の年二回、御塩殿のカマドで焼き固めて三角錐形の堅塩に。御塩として神宮の諸祭典に用いられるのです。

塩は調味や食物の保存だけでなく、生命維持に不可欠なミネラルを含んでいます。水や米とともに神棚に供えたり、相撲の土俵や、葬式の帰りに玄関先で撒くのも、すべて塩がものを清める働きがあると信じられてきたから。

神宮では祭典に先立ち、神饌や奉仕者が必ず御塩で祓い清められます。

禊のルーツは神話に

穢れを祓い、身を清める禊のルーツは神話にあります。黄泉国（よみのくに）から戻られた伊弉諾尊（いざなぎのみこと）は、美しい水が流れ込む入江で身についた穢れを洗い流すうち、最も尊い神、天照大御神をお生みになりました。

川という漢字は、水の流れを表す象形文字（くを三つ並べた）です。災いの字は、水と火の組み合わせ。古代の人々はその霊力とともに脅威を知るからこそ、平安を祈り続けてきたのでしょう。

宮域林を育み、田畑を潤し、御塩のもととともなる清き流れ。五十鈴川は二千年の昔から心身を清める川として崇め敬われてきたのです。